

## 《私の1枚》～研修を振り返って～ Part 1

### 【小山市立豊田小学校 大山 慧】

#### 「普段食べているものの背景」

この研修を通して、色々な施設を訪問しました。私の心に残っていることは、人と食べ物のつながりです。普段何気なく食べているものには、様々な背景があるとわかりました。私は、今まで食べ物の背景を考えたこともなく、何気なく食べていました。しかし、自分が食べるものの背景を知るとはとても大切だということがわかりました。

フィールドワークでは、アジア学院に行きました。私は、発展途上国では当たり前のように無農薬で作物を育てていると考えていました。だから、その学生に「なぜわざわざ日本に来て学んでいるのか」を聞いた際に「自分の村では作物を育てるときに農薬を使っている」ということを聞き、とても驚きました。学生は、農薬を使うことは体にも心にも良くないと考えていて、有機野菜の作り方を勉強しにきたということを教えてくれました。



12 つくる責任  
つかう責任



他にも、アジア学院では、鶏や山羊を飼育していたり、自分たちが食べる作物は自分たちで作ったりしています。調理するまでにたくさん時間をかけています。私は食べ物が一から育てられている過程を想像し、食べ物を残さないこと、様々な人が関わっていることを知り、命や食べ物を作る人に感謝し食べることが大切だと考えました。

私はこれらのことから、自分が食べるものの背景を知ることの大切さを学びました。これからも食べられることに感謝し、生活していきたいと思います。

### 【つくば市立上郷小学校 白澤 拓也】

#### 「誰かのために自分にできること」

「SDGs」「多文化共生」「誰一人取り残さない世界」などの言葉を知ったのは、私が教師になって数年経ってからです。それまで私は、「世界には貧しい国や地域があるが、日本にそれほど関係ない」「日本には外国人がたくさん住んでいるらしい」と考えていました。なぜならば、私の身の回りには、貧しくて生活に困っている人はおらず、外国人がたくさんいるわけでもなかったからです。

今回の教師国内研修で、少しずつ世界のことやSDGsについて知ることによって、私の考えるSDGsが他人事から自分事に変化しました。その中でも、大きく考え方が変化したと感じた研修が、8月に行われたフィールドワークです。

選んだ写真は、「はじめのいっぽ保育園」の写真です。常総市にあるその保育園では、外国にルーツのある子どもを受け入れ、子どもと保護者のサポートをしています。



10 人や国の不平等  
をなくそう



実際に保育園内を見学したり、常総市における在留外国人の現状や茨城 NPO センター・コモンズでの取り組みに関する話を聞いたりすることで、自分が知らなかっただけで、身近にこんなにも課題があることを痛感しました。教師国内研修で体験したこと、学んだことを生かして、これからの自分にできることを考えたときに、「何かすごいことをして世界を変えよう」ということだけが大切ではなく、「身の回りにある課題について考え、できることをすぐに行動に移す」ことが大切であると考えました。

## 《私の1枚》～研修を振り返って～ Part 2

【神栖市立波崎第二中学校 木村 美奈子】

### 「研修を通して学んだこと」

「SDGs や国際教育を一体どのように学校教育に位置付け、進めていけばよいのか？」と考えていた私にとって、今回の教師国内研修は、またとない、絶好の、そして最後のチャンスだ！と思いました。研修の内容は私の予想とは少し違っていました。とにかく体験や活動が多かったのです。はじめは少し戸惑いましたが、体験の中で初めて知ること、改めて気付くことがたくさんありました。

なかでも、ブラジル人学校での箏(こと)の体験学習が心に残っています。「外国人の子供たちに日本文化を」をコンセプトにペアの先生と考えて決めた授業でしたが、ポルトガル語の数称が分からないので、色で弾き方を示しました。その時の「さくらさくら」の音色は、忘れられません。



今後、教師として、生徒にも豊かな体験の機会を与えていきたいと思います。そして、体験から学び、その学びを次の学習に繋げていけるようにして、生徒が学校で豊かに学び、みんなで学ぶ喜びを味わえるようにしたいと思います。

そのために、私自身はこれからもアンテナを高く保ち、様々な出会いを求めて、アクティブに学び続けたいと思っています。

【日立市立日高中学校 横倉 由佳】

### 「SDGs の実践について考えたこと」

研修を通して様々な出会いや体験がありましたが、一番印象に残っているのは、アジア学院での1日です。私は近くにこんな場所があることを全く知らずにいました。あの暑い夏の日、食べるために鶏を絞めるところを見て、畑を耕し、みんなで同じ食事を食べました。隣にいたのは、三重から来ている高校生の女の子でした。将来も農業に携わっていくと決めた彼女の泥が詰まった爪と傷いっぱいの手、そして夢をもつ人特有の目の力強さが忘れられません。ネイルや観光を楽しむ年ごろなのに、1日中土に向き合う彼女は、本当に綺麗で圧倒されました。ワークショップを通して、さらに「食べる」「生きる」「創る」という当たり前で、しかしとても大切なことを深く考えました。



研修の前は、SDGsについて知らない不安が先行していました。しかし、学んでいくほど、これまでの丁寧な暮らしがSDGsにそのままつながっていることを知りました。アジア学院でも、「特別なことをするのではなく、今までやってきたことが SDGs なのだ」と教えていただきました。

またいつか、アジア学院に行きたいです。私にとってこれからの生き方を考える契機となった大切な場所になりました。

## 【つくば市立春日学園義務教育学校 國谷 雅之】

### 「アジア学院での学びで感じたこと」

栃木県那須塩原市にあるアジア学院にてフィールドワークを行いました。最初に「共に生きる」というテーマで講話やディスカッションを行いました。日本の食料自給率(約 39%)やアジア学院の食費(約5万円/月)ということを知り、自分は食を無駄にしていなかっただろうか、今まで食を大切にしていたのだろうかということを考えさせられました。学生はアジア農村地域より15ヶ国・30名が学びに来ており、私たちも学生と一緒に畑を耕し、畝を作りました。学生は母国に帰り、リーダーとして尽力することになります。同学院では3つの柱を掲げており、1つ目はフードライフ、2つ目はサーバントリーダーシップ、3つ目はコミュニティーオブラーニングということを教わりました。村の発展のために学ぶ学生のエネルギーや食に関する目標にもすごいものがあると感じました。



17 パートナーシップで  
目標を達成しよう



また、技術を教えることよりも、源と思っていなかったものを探し、見つけ出すことに重きを置いているということを知り、自分自身の食に対しての価値観や食に対する感謝の心に変化を感じました。

最後に、SDGs を Planet(地球)・People(人)・Prosperity(幸福)・Peace(平和)・Partnership(パートナー)の5つに分けたアジア学院の教えから、今まで見ることのなかった世界をより考え学びたいと思うようになりました。

## 【桜川市立桃山学園 谷中 達也】

### 「誰一人取り残さない 学び直しを通して」

私は、教師国内研修に参加する以前は「SDGs」という言葉に、遠い距離感を抱いていました。しかし、教師国内研修でのワークショップやフィールドワークを通して「SDGs」が私にとって身近なものに変化していきました。

特に私が心に残っていることは、第2回のフィールドワークで訪れた常総市立水海道中学校の夜間学級でした。様々な理由から十分な義務教育を受けることができなかった人々のための「学び直しの場」として活用されていました。私は、外国籍やお年寄りの方の授業を受けている様子を参観して、教師側の教材研究の質の高さに驚きました。一人一人の生徒の実態に合った発問や明瞭な指示、効果的な ICT 機器の活用は、まさに個別最適な学びでした。そして、丁寧で分かりやすい日本語指導から、これから日本で生きていくために必要なスキルを熱心に伝える教師の使命感を感じました。学び直しを通して、誰一人取り残さない社会の形成につながっていることを感じる機会となりました。



4 質の高い教育を  
みんなに



また、交流体験では、柔道を体験してもらう場を設定しました。最初は外国籍の生徒に言葉が通じないのではないかという不安がありました。しかし、道着を着て一緒に体験することで、言葉の壁は消え去ったように思えました。みんな目を輝かせながら一生懸命に取り組んでくれました。交流体験を通して、不十分な言葉かけの指導にもかかわらず、熱心に取り組んでくれた生徒には感謝しかありません。柔道の基本理念である「自他共栄」には、共に協力しながら成長する意味があります。様々な教育活動を通して、子どもたちのためにも、教師自身が成長して、全ての人々が安心して生活できる社会を形成していく使命感を学びました。

## 《私の1枚》～研修を振り返って～ Part 3

【宇都宮市立姿川第二小学校 仲田 志穂】

「全ての人が学びに参加できる機会を」

水海道中学校夜間学級には、様々な事情で中学校を卒業することができなかった人、中学校を卒業しているが、様々な事情により義務教育を十分に受けられなかった人、在留資格のある外国人で、日本の義務教育に相当する教育を受けられなかった人など、国籍は10か国、年齢は10歳から70歳までと、様々な状況の生徒が在籍しています。国語の授業では、日本語能力のレベルに応じてクラス分けをし、生徒の実態に応じた指導を行っています。参観当日は、「意向系」の学習をしていました。意向系とは、「食べよう」「作ろう」など、「～よう」で表される言葉のことです。普段何気なく使っている日本語には様々な決まりがあり、外国人として日本語を習得することの難しさを感じました。

生徒一人一人の実態に応じてどのように授業づくりをしていくか、先生方はお互いにアイデアを出し合いながら考えています。「全ての人が学びに参加



できるようにすること」は、夜間中学校に限らず、教育活動に関わる全ての教員が目指すべきところでもあると思います。

私が日々接している学級の子どもたちはみんな同じ年齢の日本人ですが、得意不得意、興味関心、学び方等、一人一人実態は異なります。一人一人の学びを充実させるためには、どのような手立てが必要なのかを考え、「どの子も学びに参加できるような」丁寧で思いやりのある授業づくりを心掛けていきたいです。

【つくば市立高山中学校 大方 彩子】

「いろいろな人たちと考えを交換することで考えたこと」

JICA の教師国内研修を通して、様々な施設を訪ね、SDGs や国際理解、多文化共生の課題解決への視点をもって見学することで、今までとは違った視点で物事を考えるきっかけとなりました。特に、私が心に残っていることは、アジア学院でのフィールドワークでした。世界から集まった様々な国籍やルーツをもつ人々が、どのように平和的で持続可能な方法で、共に生きるアイデアを分かち合い、コミュニティ基盤づくりを学んでいくのか、非常に興味深い体験でした。アジア学院では、持続可能な社会を築く土台として、「コミュニティ・奉仕・食」を重要事項として農村指導者プログラムのカリキュラムが形成されていました。アジア学院で大切にされていることは、これまで、実際の学校教育現場でも、生徒たちに身に付けてもらいたいと思っているスキルでした。



アジア学院で学生たちが、サーバントリーダーシップ・持続可能な農業・コミュニティ構築をどのように身に付けていくのか、そのプロセスを知ること、実際学校に帰ってからどのように生徒の育成に役立てていけるか、示唆に富んだアイデアを得ることができました。今後、教員としても、一人の人間としても、今回学んだSDGsや多文化共生の実践をできることから、実行していこうと思います。